トルコ族の拡大と隋唐帝国

千葉県立市原八幡高等学校　廣川みどり

はじめに

これまでの教科書では、中国史を一つの独自の文明圏として取り扱い、殷から清までの王朝の歴史が順を追って記述されていた。中国各王朝によって編纂された正史を中心に考えられ、農耕民である「漢民族」と周辺の「夷狄蛮戎」の関係が描かれた。そして、遊牧民については略奪のために農耕社会に侵入を繰り返し、やがては中国社会に同化してゆく存在として書かれている場合が多かった。

しかし、ここに扱う帝国書院の『新編　高等世界史B』では、ユーラシア大陸の東西、あるいは南北をつなぐ「中央ユーラシア」という視点を重視し、いわば「遊牧民から見た世界史」という側面も取り入れているのである。

この単元の授業に際して注意したことは、生徒にとってなじみの薄い突厥や拓跋国家について、どのように興味・関心をもたせたらよいかということであった。生徒たちに親近感を抱かせ、広い世界へ視野を向けさせるために、日本との関連性や、現代とのつながりを考えさせたりした。

導入　視点を日本からユーラシアへ

黒板にユーラシア大陸を板書し、これまでに学習した中国・インド・ペルシア・ギリシアなどの地域に○でしるしをつけてゆく。生徒に「この広いユーラシア大陸にさまざまな文化が存在した。それぞれが独立した異なった文化だったのか。」「○と○の間は、どのようになっていたのか。また○と○を結ぶものは、いったい何だったのか。」などの発問をする。

まず、この単元で取り扱う時代の日本文化とユーラシア大陸のさまざまな文化との関連について考えさせる。飛鳥文化（6世紀中葉～7世紀後半）については、法隆寺の四騎獅子狩文錦や竜首水瓶には明らかにペルシアの影響が伺える。また、仏像彫刻にはガンダーラや竜門の石仏からの伝播の様子があらわされている。

白鳳文化（7世紀後半）では、法隆寺金堂壁画飛天図（右上写真）と敦煌石窟壁画（右下写真）の類似点や高松塚古墳の壁画と永泰公主墓の壁画（「図説ユニバーサル新世界史資料 三訂版」p.53）の比較をすることができよう。さらに、天平文化（8世紀）を考えれば、正倉院宝物のガラス器はササン朝ペルシアに同様なものがあるし、螺鈿紫檀五絃琵琶には駱駝にのって琵琶をひく胡人が描かれており、西域の影響が明らかである。

こうした日本史や世界史の教材として使われている図版を用意し、ユーラシア大陸の諸地域の文化が大陸の東端にある日本と深くかかわっている事実を確認する。同時に、地図に○を書いたところだけで文化が発達したわけではなく、○と○の間を生活圏としていた人々が存在していたことを認識させる。そして、「中央ユーラシア」という視点にたち、そこから周囲をながめた歴史像の組み立ても可能なのだということを理解させたい。

展　開

①　東西をつなぐトルコ族への理解

生徒は、遊牧民国家についてのイメージをなかなか描くことができない。突厥の国家を理解させることにより、東と西をつなぐ媒体となった遊牧民国家という説明を試みることができると思うのである。

現在の中央ユーラシアには、西はトルコから、旧ソ連より独立したウズベキスタン・カザフスタン・トルクメニスタン・キルギスや中国の新疆ウイグル自治区など住民の多くをトルコ族がしめている地域が広がっている。トルコ族の起源ははっきりしないが、紀元前3世紀ごろに丁零の名で『漢書』に記され、バイカル湖の南方からアルタイ山脈北方にかけて居住し、匈奴に服属する遊牧民であった。今日では、ほとんどがイスラムに改宗して生活している。そのトルコ族の台頭の様子を述べる。

6世紀の半ばに、世界史上はじめて、ユーラシアの東西にまたがる遊牧帝国が出現した。突厥である。突厥は、テュルク（つまり、トルコ）の中国語音訳だという。柔然・高車・エフタルという中央ユーラシアで三国鼎立だった状態を、次々に打倒・吸収して巨大な

遊牧国家を形成したのである。

東西の草原地帯をひとつにおさめた突厥については、２つの特色を理解させる。１点めは、突厥が巨大な政治連合体であったということである。強力な中央権力が存在したのではなく、カガン（可汗）を中心とした複数の権力者たちが、それぞれ服属民と支配領域をもっていた。服属民は、遊牧民の他にもオアシスなどの定住地域の農民や都市民、商工業者を含んでいて、さまざまな人種の複合体であった。つまり突厥は、他の遊牧民国家のほとんどがそうであったように、多様な住民や社会を、遊牧民の強力な軍事力によって支配する国家だったのである。しかも、支配者たちの側も大小の分権勢力が割拠するゆるやかな大政治連合体だった。それゆえ、中央の統合力は弱く国家草創から30年ほどで東西に分裂してしまった。

突厥のもう１つの特色は、ソグド商人との密接な関係である。アム川とシル川の間のソグド地方を本拠地としたイラン系定住民のソグド人は、東西南北の交通路に沿って植民集落をつくり、中国、モンゴリア、ビザンツ帝国にまで進出して国際貿易を行った。彼らは、突厥という広域権力の庇護のもとに通商網を広げ、活発な経済活動を行っていたのだ。商業面だけに限らず、文化・政治・外交の面でも大きな足跡を残している。なおソグド商人は、突厥にかわって同じトルコ系のウイグルが強力になると、これとも深くつながり、唐代の中国に馬を運び絹をもち帰る「絹馬貿易」を繰り広げ大きな利潤をあげたという。

突厥とソグド商人との提携は、軍事力をもつ遊牧民と経済力をもつオアシス都市民との共存関係を示している。広大なユーラシアを構成する各文明圏がばらばらだったわけではなく、人も物も文化も相互に交流していたのである。

② 拓跋国家への理解を深める

従来、隋・唐に関する教科書の記述は、長い分裂期であった魏晋南北朝時代を再び漢族国家が統一したかのごとく描かれてきた。この教科書では、北魏にはじまる北朝から隋・唐までの諸王朝を「拓跋国家」という言葉を使って、一括して取り扱っている。氏族名称であった拓跋が、西方においては訛った形で中国を代表する呼び名となった。たとえば、７世紀はじめのビザンツの歴史家テオフィラクタス＝シモカッタは589年の隋の統一を「タウガス Taugas の統一」と表現しているという。

拓跋国家は、鮮卑拓跋部出身の支配層が中核となり、非漢人諸部族や漢人を取り込んだ政治連合体である。北魏から唐にいたる過程で、遊牧と農耕、鮮卑諸部族と他の諸部族、漢人と非漢人などが共存して混沌としていた地域を軍事力によって統合した。制度面では均田制や府兵制などを発展させ、隋唐帝国として中国の統一王朝となったのである。

③ 唐代の東西交流

唐は、国家の根幹にかかわる行政・軍事・法律については、北朝の伝統をうけつぐ一方で、芸術や文学といった文化面では、南朝の貴族文化を多くうけつぎつつ、国際性に富んだ文化を発展させた。世界的な国際都市であった長安は、100万人近い人口を集め、多くの外国人が集まっていた。前に示したソグド人や日本の遣唐使・留学生等はもちろんのこと、多くの外国人が長安に居住した。アッバース朝により滅ぼされたササン朝ペルシアの遺民たちが、唐の庇護を求めて移住し、674年には、ササン朝の亡命王子ペーローズが、はるばる来朝しているという。

具体的に唐代の文化交流について、言語の面から考えさせてみる。有名な「大秦景教流行中国碑」の碑文には、漢字に加えて碑の下部と側面に古代シリア文字の記述もなされている。シリア文字は、アラム文字から生まれたもので、ソグド文字やウイグル文字、モンゴル文字などとも同系統に属する。この碑文は、ユーラシア大陸における文化交流を物語る史料なのである。

また、７世紀前半に陸路でインドに行った玄奘は、当時の唐の国禁を犯して出国したのだが、その苦難に満ちた旅はトルファンの高昌までであったという。高昌の王が西突厥の王に紹介状を書いてくれ、玄奘は突厥王にソグド語の通訳をつけてもらい、その庇護のもとで楽々と西トルキスタン諸国を通過したという。玄奘は、全盛期であった西突厥の勢力圏を通り、インド亜大陸に到達することに成功したのだ。

おわりに

中央ユーラシアという地域を考えてゆくと、モンゴル帝国成立以前にもさまざまな民族・言語・文化を包括した巨大な国家が成立している。それは、強力な軍事力をもった遊牧民によって形成された。19世紀のドイツの学者リヒトホーフェンが使った「シルク＝ロード」という言葉を使う場合、東と西の文明を重視しその間の地域を軽視する傾向がある。しかし、そこを生活圏としていた国家や人々に注目し、歴史をひもといてゆくことも可能なのである。

本来であれば、唐代にはすでに義浄のように海路を利用した交通網も開かれており、イスラム勢力との関連にも言及しなければいけないと思われる。より広い視野にたち、生徒の思考力を高め、興味・関心をひきだすような教材を模索してゆきたい。